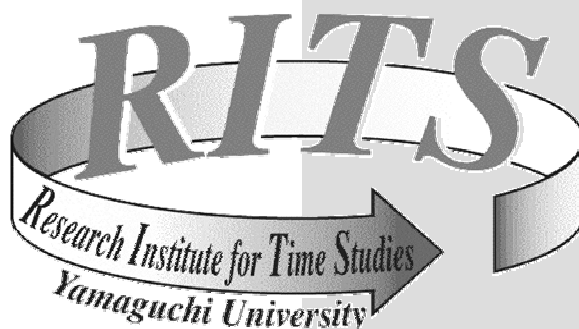


## 山口大学 時間学研究所 ニュースレター



2006.11.27 No.2

1. 学術講演会のお知らせ
2. 寄稿(ジュマリ・アラム氏)

山口市吉田 1677-1 時間学研究所

URL: <http://www.rits.yamaguchi-u.ac.jp>  
(セミナー等の告知は上記 URL をご覧下さい)



### 学術講演会のお知らせ

#### ・時間学研究所 学術講演会『心と時間』のお知らせ

来年の年明けに、学術講演会を開催いたします。大学関係者はもちろん、一般の方にも足を運んで頂けるよう、開かれた内容の講演会を企画しております。ふるってご参加下さい（事前の予約や、参加費用等は不要です）。

<開催日時・場所>

2007年1月13日（土）13:00~17:00 山口大学医学部（宇部市）霜仁会館 3階会議室

<講演内容>

『うつ病－養育環境とストレス脆弱性－』

渡邊義文 教授 山口大学大学院医学研究科（精神科神経科）

『非行少年と時間－彼らは時間をどのように体験しているのか－』

河野荘子 助教授 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

『からだのリズムと心身の健康－冬季うつ病を中心に－』

平野 均 助教授 山口大学保健管理センター

『ストレスと時間－脳に良いストレス、悪いストレス－』

中村彰治 教授 山口大学大学院医学研究科



## 寄稿

ジュマリ・アラム氏（山口大学教員）の原稿を掲載いたします。本稿は、時間学研究所理論的時間研究部門・基礎論セミナー（8月4日）での発表に基づくものです。

### アボリジニの神話と芸術に見る「聖なる主体的な時間」

ジュマリ・アラム（人文学部）

宗教学研究は、アボリジニの社会・文化・芸術から、数多くのことを学んできた。「トーテミズム」と研究者の間で呼ばれるようになった彼らの世界観と社会システムが、宗教という人間社会の普遍的な現象を理解するための重要な手がかりを示すものとして重宝されるようになったからである。

一方、アボリジニの芸術は、かつてはあまり重要視されなかったが、20世紀半ばから注目を集め、現在では、世界各地の美術館を堂々と飾り、また芸術の世界における重要ジャンルとしての地位を確立している。一見して、あまりにも素朴かつ抽象的で、またときには歪さを感じさせる彼らの芸術作品からは、現代人の生き方や精神世界とのかかわりが容易に見て取れないのだが、その素朴さと歪さの背後に潜められているものを多少でも理解したときにこそ、われわれは彼らの芸術の深さと凄まじさというものに圧倒されずにいられないのである。

アボリジニの芸術を理解するには、まず「ドリームタイム」（または「ドリーミング」）という、彼らの神話と世界観の重要なメカニズムについて知る必要がある。芸術は、このドリーミングという文脈の中で行われている生活の一面である。

「ドリーミング」とは、かつて西洋人には異様に見えたアボリジニの文化・芸術・信仰・神話・コスモロジー・時間観・スピリチュアリティの世界を、一定の枠組みに沿って説明するために、研究者たちが好んで用いた概念である。

この語が使われたもっとも古い文献には Baldwin Spencer と Francis Gillen によるものがある。なおこれらの調査報告書で当初用いられたのは「ドリームタイム」という語であり、中央オーストラリア（北部準州）のアランダ族が“alcheringa”というふうに表現したことを、Gillen が造語的に英訳したものである。その際に Gillen は、アランダ族の言語体系において alcheringa は、夢のように／曖昧で漠然とした「先祖の時代」「遠い過去」を指すものであると解釈し、ドリームタイムは単に「夢の時代」「神話の時代」という意味において用いられた。

しかし Spencer はその後の調査で、アランダ族が用いる *alcheringa* の語の意味をより深く分析し、重要な事実気づいた。すなわちこの語は、「先祖による創世の時と出来事」を指すと同時に、なんと本当に英語で言うドリーム／夢（睡眠の意識状態に起こるイメージ）およびそれをイメージすること、すなわちドリーミング／夢見の意味を含んでいたのである。また、そのほかの研究者によるアランダ族以外のアボリジニの研究からも、*alcheringa* に相当する重要概念が複数知られるようになり、その意味と用法にはバリエーション的な幅があるものの、およそすべてに共通するのは、「先祖による創世の物語／神話」と「夢」とを同時に指すものとして解釈できるという点である。こうしてドリームタイム／ドリーミングはアボリジニの生と世界のさまざまな面を特徴づける概念として定着するようになった。

しかしアボリジニの世界観においては、ドリームタイムの先祖による創世は、決して過去の物語としてみなされているのではない。たとえば、次のような先祖（人、動物、超自然的な力をもつ存在、または互いに入れ代わることができる曖昧な存在）による世界の創造が、物語として語られる。「先祖は不毛な未分化の野原を横切るように移動／旅しながら世界を構築した」。「先祖は旅に出る前に、翌日の冒険や出来事について夢を見た」。「先祖は夢を行動に移しながらあらゆる自然物、人間、部族、氏族、動物、植物を生み出した」。

これらの物語は事実であり、直線的な時間／歴史的過程として解釈されるのではなく、現実の次元を指すのである（今を基礎づける、終わりのない物語）。またドリームタイムは、アボリジニの住む空間と永遠に結びつく。ドリームタイムは居住地を基礎づけ、形作り、活かすのである。アボリジニの居住空間と地形は、ドリームタイムとの結びつきを保ち続けているがための存在である。また、アボリジニの狩猟生活は、旅と野営をしながら、その時々とその空間が、ドリームタイムの物語を反映するものとして捉えられている。したがってドリームタイムは、服従するものではなく、実現するものなのである。先祖が見て実現した夢を、今も永遠に、アボリジニが見て実現するのである。

また、ドリームタイムは進歩・進化を想定しない。アボリジニには元々時間という概念は知られておらず、去った時間（過去）も来る時間（未来）も存在しない。ドリームタイムは、過去から未来へ向かう運動ではない。そこには時間的な経過も、歴史も、時間の距離／幅／間隔も、存在しない。あるのは、夢の世界と現実の世界を結びつけるもの、すなわち、主観的状态から客観的状态への表現／実現であり、つまり内面と外面にまたがって起こる物事や出来事の移り変わりのみである。

同じように、空間も、距離・幅・間隔として捉えられることはなく、意識と無意識の関係として捉えられる。空間にある知覚可能な実在は意識に相当し、対象間に存在する見えない空間は無意識（夢または主観的状态、つまりドリームタイム）に相当する。

一方、アボリジニにとって芸術とは、ドリーミングの手段である、ということができる。この場合、ドリーミングが、過去・現在・未来にまたがる、アボリジニの生そのもののイメージとリアリティーであるならば、芸術は、その生を埋め尽くす／形作る／メリハリをつける／不均質化する／構造化する／生き生きとしたものとして実感させる／実現する、様式である、というふうに見ることができる。芸術が、「心の見えない内面（つまり聖なる領域）を、一定の様式を介して表現すること」であると理解するのならば、この場合のドリーミングは、心の内面的世界であると同時に、生に対する、外的な大枠の文脈である。

このように、ドリーミングをめぐるアボリジニの芸術には、次のような、生を表現するいくつかの基本メカニズムが、各芸術分野の作品および創作・表現・鑑賞活動そのものに、顕著に働いているということが見て取れる。

- ・ **【無時間性】** アボリジニの芸術は、ドリーミングがそうであるように、時間を、直線的・歴史的なものとしてではなく、「永遠の今」として表現している。絵画や舞踊によって描かれているものは、過去でも未来でもあるが、何よりも、いまを実現する試みである。
- ・ **【二次元性】** アボリジニの芸術、とりわけ絵画（岩壁画、樹皮画、ボディーペインティングなど）は、あえて立体性をもたせない手法、またはシンボリックに描かれているが、そうした芸術・絵画すべてが、見えない別の次元（次の三つにかかわる）を暗示的に表現している。つまりこうした芸術・絵画は、作者や鑑賞者の心と主体とが一体化して、はじめて（またはその瞬間や時々）表現として機能（完成）するのである。
- ・ **【自然性】** アボリジニがドリーミングの文脈の中で、トーテミズムと芸術を活かす際に、三つの領域が、自分たちと一体化したものとして、そこには表現される。一つは、動植物をはじめとする自然界である。
- ・ **【霊性】** 二つ目は、トーテム動植物と氏族の精神世界と一体化した、祖先霊に代表される、霊的または精神的世界である。
- ・ **【社会性】** 三つ目は、とりわけトーテミズムの文脈の中で規定される親族体系（近親相姦タブーを含む）に代表される、集団的精神世界である。

これらすべてに通ずる点は、アボリジニにおける芸術活動が、創作者・表現者・鑑賞者に対し、常にドリーミングに基づいた生の舞台の主演・主人公としての地位を与えているという点である。芸術活動は、この世（意味世界）の構築活動そのものであり、個々の芸術活動はすべてその一環である、ということがいえるのではないだろうか。